建築・都市アメニティグループ
木村　洋子

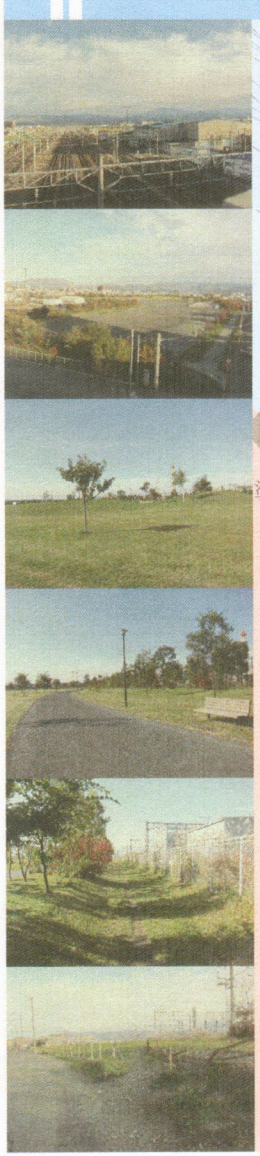
要旨

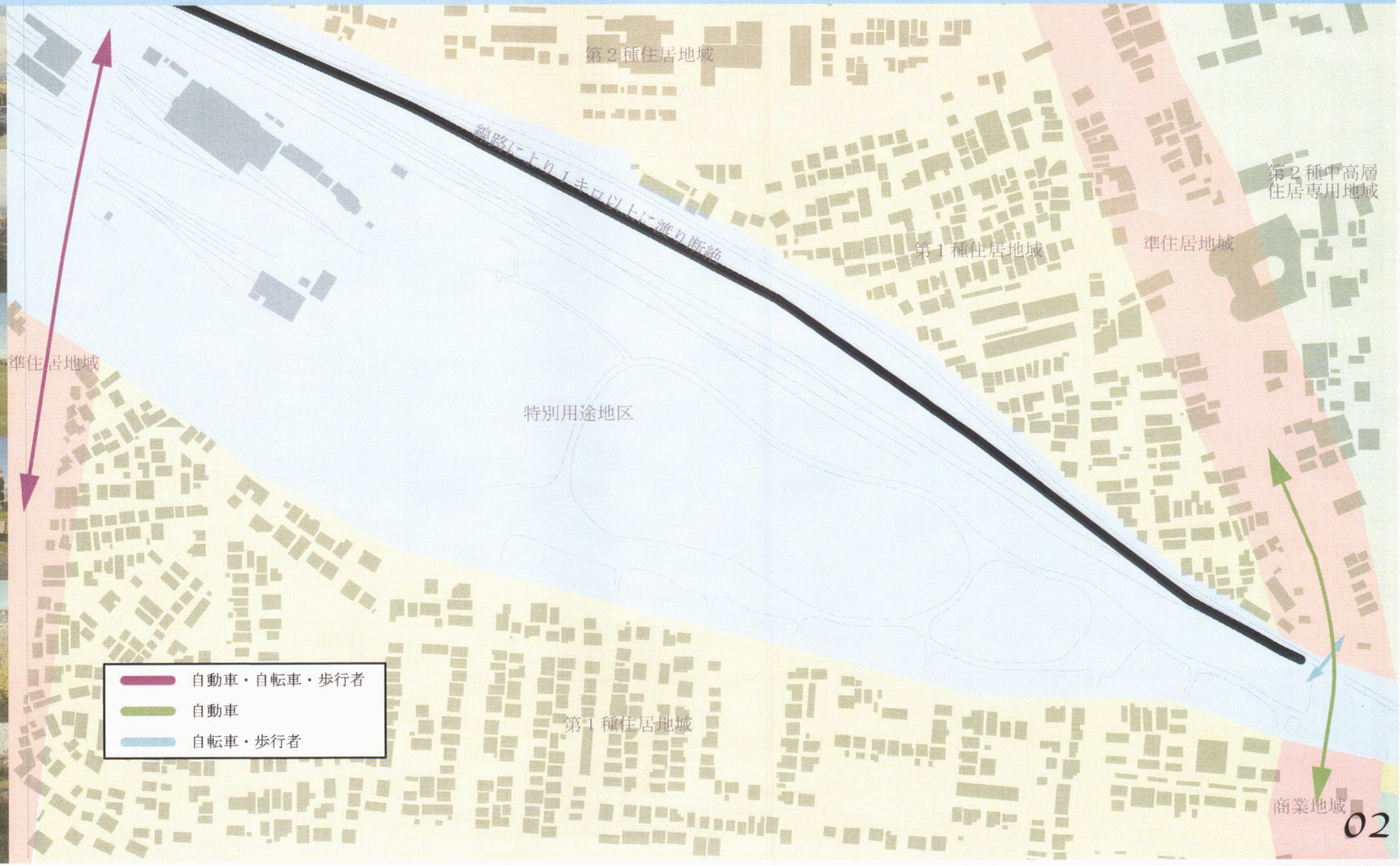
近年、地球環境問題の悪化から環境配慮の取り組みが多く行われており、環境に対する人々の関心も集まりつつあり、平成23年3月の東日本大震災では災害に対する意識が高まることとなり、その対策はよりいっそう強化されるべき課題である。また、高齢者やこども等社会的弱者の社会参加を促進し支え、安心で安全な空間の提供が求められている。そこで、災害時利用可能且つ環境や景観にとけこみ、高齢者がのんびりと時間をすごすことのできる交通・交流の拠点、そして、こどもがのびのびと遊ぶことのできる、緑の「癒し」の空間を設計する。

設計対象敷地を青森県青森市の敷地面積12.8ヘクタールの東西に長い広大な公園である「青い森セントラルパーク」とした。建築学研修よりあるニーズのある敷地に対して、そのニーズを尊重しつつ環境面に以下に配慮するかというテーマが発生したため、当時「青い森セントラルパーク低炭素型モデルタウン構想」の事業に動き出していた青森県・青森市の両行政に対し、市民が反対して議論が活発にされていた青い森セントラルパークを選出した。

本設計では自由通路とそこに青い森鉄道の新駅を、公園にはバス停を設けることで重要拠点の中心として市民の移動の利便化を図り、カフェやアトリウムなどの屋内空間と公園という屋外空間があることで、自由な交流の選択ができるものとした。また公園にはこどもの遊び環境の向上としてプレーパークを導入した。敷地の外周にあるウォーキングコースは、敷地内で遊ぶこどもたちを自然監視可能な状態にし、犯罪や事故から守りやすいディフェンシブルシステムを導入した。雪との共生も重要項目であるため、冬期には期間限定の遊び場である幸雄かをつくり遊び場として活用、雪室や貯雪庫を設けることで春には幸雄かの雪も余すことなく使い、雪を有効利用できる。デザインコンセプトを“とける”とし、周囲の景観にとける・地域の環境にとける・日本の四季にとける、の三つを軸とした、親しみを持ちやすく、市民に長く愛される空間を目指して計画を行う。

地域全体でこどもを守り、積極的な市民参加を誘発する空間として、自由通路を建築することで南北を一キロ以上に渡って分断していた線路上の行き来を可能としてアクセス性を高め、こどもがのびのびと安全に遊ぶことのできる環境づくりのため自由通路とプレーパークの設計をした。更に景観や四季との融合を考えたことから、青森市では特に雪害が顕著であるため、それに適した設備を取り入れた。今後は重要拠点である青森駅周辺、合浦公園、浜田地区に焦点を当て、無秩序な市街地拡大を防ぎ、円滑なネットワークを図ることができる都市づくりをする必要があると考えられる。

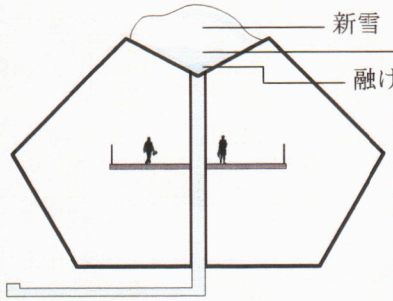




東側立面図（1/500）

a-a'断面図（1/500）

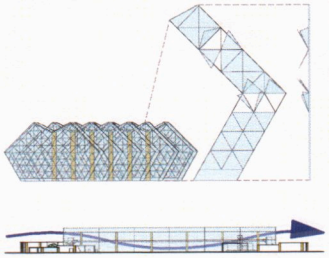
スノーダクト方式無落雪建築

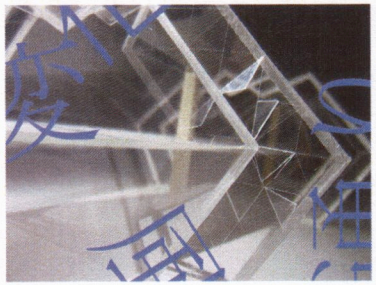


屋根伏図（1/500）

0　20　50 [m]

開閉式ダンパー

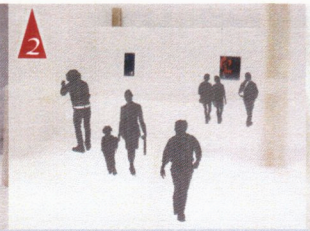




南側立面図（1/500）

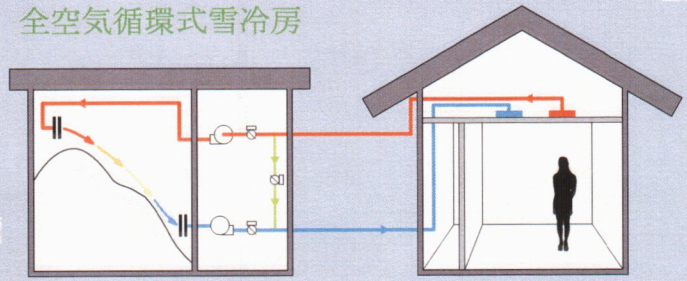
b-b'断面図（1/500）

0　20　50 [m]

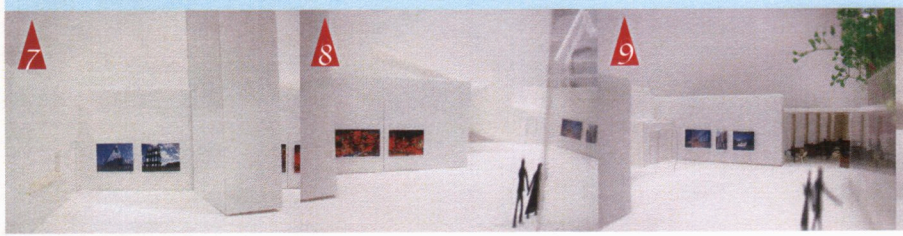


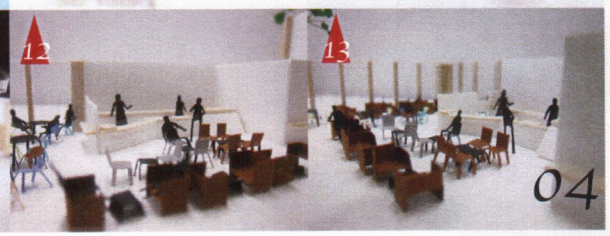
北棟

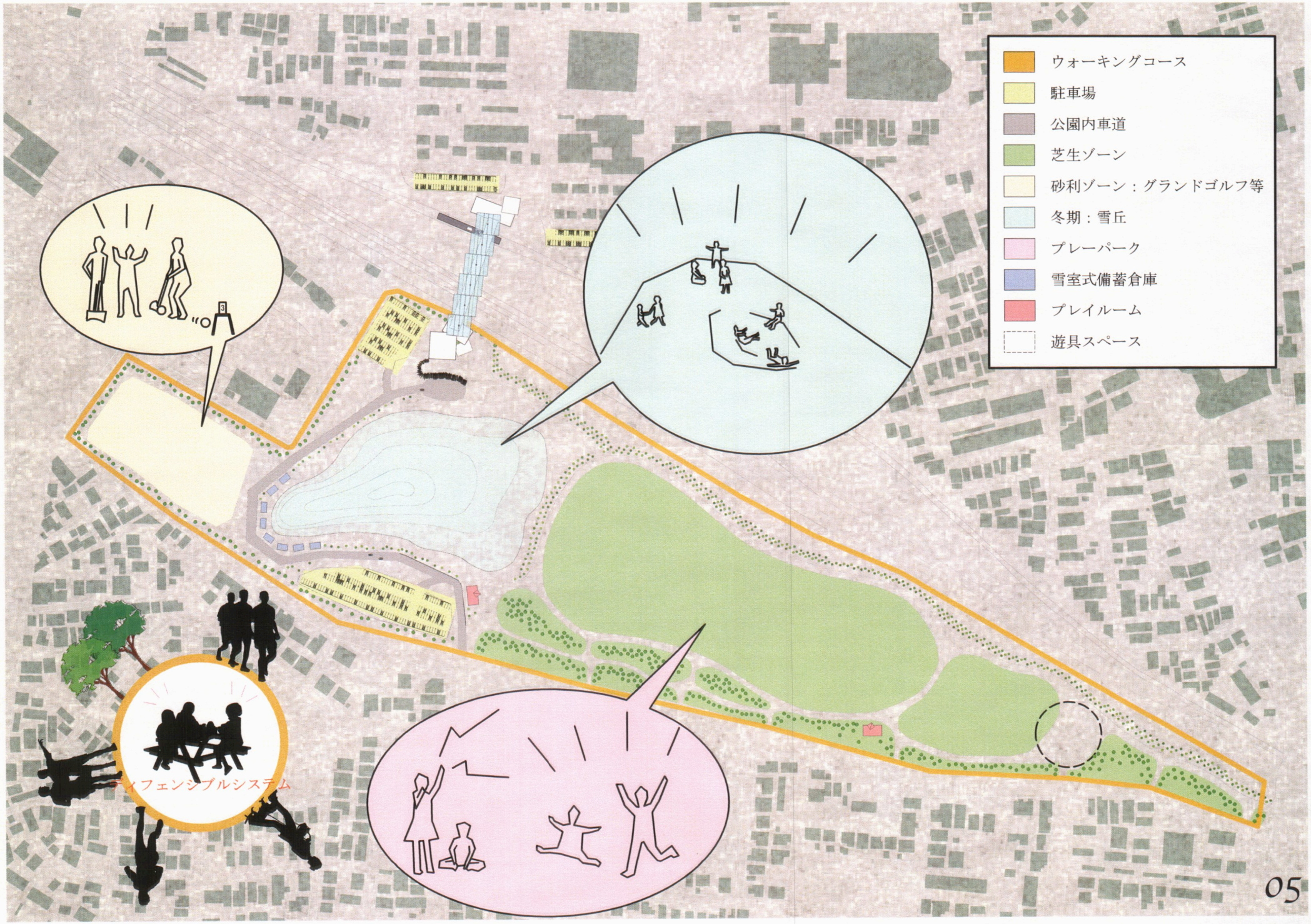
全空気循環式雪冷房



南棟






ウォーキングコース
駐車場
公園内車道
芝生ゾーン
砂利ゾーン：グランドゴルフ等
冬期：雪丘
プレーパーク
雪室式備蓄倉庫
プレイルーム
遊具スペース
ライフェンシブルシステム